

組織目標評価報告書（平成26年度）

部局名：埋蔵文化財調査研究センター

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<p>①教育領域</p> <p>①-1 目標</p> <ul style="list-style-type: none"> 「博物館実習」の一部を分担し、構内遺跡における調査・研究の成果を教育活動に活かす。授業担当者を中心に他の教員ならびに実習内容に精通した非常勤職員の補佐によって、きめ細やかな教育体制を保持する。また、学生に対して自発的な思考や発言を促すことによって、授業における習熟度をあげる。 「構内遺跡の発掘調査」や「その報告書作成」などを業務とする本センターの職場環境を、幅広い分野の学生に提供し、社会性を高めるための教育的支援や経済的支援を行う。 学習・研究の場として、授業や学生の受け入れに努める。 <p>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <ul style="list-style-type: none"> 「博物館実習」の終了時に、学生による発表形式(プレゼンテーション)の時間を設定する。 「オンザジョブトレーニング」の戦略的教育経費を獲得する。 「オンザジョブトレーニング」で雇用する学生は、考古学専攻生に限らず複数の学部を対象とし、4名程度とする。 	<p>自己評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 博物館実習の授業：構内遺跡出土の遺物を対象に、8月7～21日に実施した。受講の学生約40名を4班に分け、それぞれ2日間の授業とした。こうした1班10名程度の少人数制や、個々人の発表を加えるなどの工夫で習熟度を高めた。 学生雇用による支援：オンザジョブトレーニングとして獲得した戦略的教育経費で5名の学生を、そしてワークスタディで1名を雇用した。所属分野は理・工・文・法の4学部にわたっており、幅広い分野の学生に対して、経済的・教育的支援を行うことができた。 その他授業の受け入れ：3コマの授業を受け入れた。受講生数は全体で221名である。内2コマは、構内遺跡出土遺物を中心にした展示会を利用したもので、受講生数は合計158名である。各学生の生活の場である構内から出土した考古資料やその展示方法を、ごく身近に体感するという授業スタイルは、通常の講義では得られない効果を発揮したことが、アンケート結果からも確認できた。
<p>②研究領域</p> <p>②-1 目標</p> <ul style="list-style-type: none"> センター教員の個別研究を進め、全教員が科研費などの申請を行い、外部資金の獲得に努める。 鹿田遺跡・津島岡大遺跡をはじめとする埋蔵文化財の調査研究に関して、関連科学分野や周辺の自治体との連携を強化し、幅広い研究分野に資するような研究の推進に努める。 研究成果を広く外部へ発信し、多様なニーズに応える。 FARO(三次元計測機器)を活用した調査研究を推進する。 <p>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <ul style="list-style-type: none"> 科研費の申請率を100%とする。 研究面での連携にあたって、関連分野の研究者に構内遺跡出土の資料を提供する。 地元自治体と連携し研究の場を設ける。 調査研究成果を、紀要などの印刷物や研究会、あるいは展示会などで発表する。 	<p>自己評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 科研費などの申請と獲得：教員全員が科研費を申請し、申請率は100%を超えた。外部資金の獲得は2件で、合計100万円である。 関連分野との連携：2件があげられる。1件は、鹿田・津島両地区のポーリングデータを自然科学研究科の教員に提供し、岡山平野の形成に係わる共同研究の推進に寄与した。もう1件は、構内遺跡出土の縄文時代～中世の編組製品の資料を、研究グループに提供した。 地元自治体との連携：岡山県教育委員会が実施している発掘調査に対して、FAROを利用して調査を補助し、吉備の弥生時代研究の推進に資することができた。 構内遺跡の研究発表：鹿田遺跡の研究結果を、紀要で1件・学会誌に2件、論文や資料紹介として発表した。また、展示会の講演あるいは展示内容にその成果を反映させることで、情報発信に対する多様なニーズに応えた。
<p>③社会貢献(診療を含む)領域</p> <p>③-1 目標</p> <ul style="list-style-type: none"> 近隣の自治体が開催する講座などの活動への協力あるいは地域の文化財保護についての指導的な助言を通じて、社会との連携や文化財行政などに寄与する。 地元の小・中学校などの教育現場からの要望を受け入れ、社会と連携し協力を図る。 展示会を通じて、構内遺跡の研究成果をベースにした明るい話題を社会に提供し、岡大のイメージアップにもつながる活動に取り組む。 <p>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <ul style="list-style-type: none"> 自治体からの講座などの講師依頼に応じる。 岡山県の委員会や審議会などを通じて、年間に数回は、岡山県下における文化財行政などに関する問題に助言を行う。 岡山市内の中学校から「職場体験」について要望があった場合は、最低、年間1校・生徒3名程度は受け入れる。 鹿田遺跡のイメージキャラクター名の募集を展示会企画に組み込む。 	<p>自己評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 講師依頼：3件。 埋蔵文化財行政への助言：岡山県下で3件、岡山県外で2件の委員会に対応し、助言を行った。 地元教育現場への協力：岡山市内の中学校2校から「職場体験」として、生徒計6名を3日間、受け入れた。 展示会での話題性企画：展示会の開催に合わせて、昨年度決定した鹿田遺跡イメージキャラクターの名前募集を行い、全国から78名の応募があった。展示会での決定を受けて、新聞に大きく紹介された。
<p>④センター業務</p> <p>④-1 目標</p> <ul style="list-style-type: none"> 構内遺跡の発掘調査を実施する。調査にあたっては、調査の効率化と質の向上に努める。 発掘調査の成果を学内外に積極的に公開する。 未刊行の構内遺跡発掘調査報告書の作成を推進する。 発掘調査報告書を刊行する。 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「紀要2013」を刊行する。 『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』52号・53号を刊行する。 鹿田地区・津島地区における発掘調査資料の整理作業を進める。 木製品の保存処理を進めると同時に、鹿田遺跡出土絵馬のレプリカ作成により、恒常的な保存・公開に努める。 遺物の保管形態について見直しを図り、確実かつ活用しやすい保管体制を目指す。 <p>④-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <ul style="list-style-type: none"> 発掘調査を実施し、現地説明会を1回、そして展示会は津島キャンパスで開催する。 未刊の発掘調査報告書作成を推進するために、専門的知識を有する職員を1名雇用し体制の強化を図る。 鹿田地区で6件、津島地区で1件の発掘調査資料について整理作業を実施する。 発掘調査報告書を1冊、紀要を1冊、そしてセンター報を2回刊行する。 木器保存処理を1期分行う。 鹿田遺跡出土絵馬のレプリカを作成する。 鹿田遺跡1次調査の出土遺物について、保管状態を改善する。 	<p>自己評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 発掘調査：鹿田地区において2件の発掘調査を実施した。全国的にも注目される遺物が出土し、マスメディアによって広く報道された。 現地説明会：発掘調査でそれぞれ1回、計2回実施した。見学者数は合計で300人である。 展示会の開催：津島キャンパス(創立五十年記念館)で1月7日～12日に開催した。中世の鹿田遺跡をテーマにした展示は好評を博し、見学者は延べ585名にのぼった。また、同時に開催した講演会では105名の参加があった。 専門職員の採用：発掘調査報告書作成のために、特別契約職員を1名採用し、未刊の報告書刊行の推進をはかった。 発掘調査の整理作業：鹿田地区で6件、津島地区で1件の発掘整理作業を進めた。 印刷物の刊行：発掘調査報告書1冊・紀要1冊・センター報2回の刊行を行った。 木器保存処理：1期分を終了した。 遺物の保存、保管：鹿田地区で出土した「絵馬」のレプリカ作成と鎌倉時代の「烏帽子」の保存処理を行った。また、展示会で公開し、恒常的な保存・公開に努めた。鹿田遺跡1次調査の遺物について、確実な保管状態に向けて改善を進めた。
<p>【総括記述欄】</p> <p>各項目の目標はほぼ達成し、一部では目標以上の成果をあげた。運営体制の点では、報告書刊行の推進を目的に、1名の特別契約職員を雇用できた点は重要な成果である。管理・運営面全体では、事務管理を担う事務局とセンターあるいはセンター内での教員と非常勤職員のスムーズな連携によって、滞りなく業務を進めることができた。運営面以外では、構内遺跡の調査研究の成果を論文発表や展示会を通じて積極的に発表した。さらに、近年の発掘調査では注目される遺物が相次いで出土したことに加え、展示会での多様な取り組みについて、マスメディアを通じて紹介が盛んになされた。このように様々な形で幅広い情報発信ができた点は評価されよう。展示会や現地説明会の参加人数も、岡大の構内遺跡が地元にとって魅力的な資産となっていることを示す結果をなした。教育面でも、本センターは、実物に触れる体感型授業の場として、またOJTなどを活用した社会人教育の場としての可能性を十分に示すことができた。ただし、発掘調査報告書の迅速な刊行との両立を見据えて将来を見通した場合、社会貢献あるいは教育面で、日常的かつ効果的に情報発信を行うためには、人的面あるいは設備面での見直しが求められる。今年度実施した、重要遺物のレプリカ作成などは、そうした活用を視野に入れたものであり、今年度の成果の一つといえよう。</p>	